

アズレンのふたなりだよ 指揮官が掘られるよ よろしく

戀野

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

指揮官が生えてきたいろんなアズレン娘に掘られるよ それだけだよ 指揮官は掘らないよ 受けだよ

## 目次

ポートランドに生えてきた！	1
不知火にも生えてきた！	6
アドミラル・ヒツパーにも生えてきたぞよ	10
アドミラル・ヒツパーにも掘られます！	12

ポートルランドに生えてきた！

「指揮官!! ついに私の夢が叶っちゃいました!」

約二年間指揮官をしていて1番の笑顔で言うのは、ユニオン最強のシスコンポートルランドである

「ついに私におちんちんが生えたんです!」

は?.....は?

KANISEN  
艦 船は総じて美女または美少女である。ポートルランドも例外ではない。つまりこれは.....

「幻覚か.....ポートルランド、今まで無理させてすまなかった。俺も付き添ってやるから明石のところへ行こう.....な」

「本当です! 本当に生えたんですってば!」

今まで妹の薄い本を書いたり、盗撮したりと色々問題のあるやつではあったがついにこんなことになってしまふとは.....

「むうく信じてませんね? 良いです、そんなだったら見せてあげます!」

「いいだろう! お前にそんな勇気があればの話だがなあ!」

ポートルランドだつて一応乙女である。妹のことになると暴走するがそれ以外はあらかた普通...のはず。流石の彼女でもいきなり上司に.....

ポートルランドが勢いよくショートパンツを下ろした。そこにはポートルランドの際どいパンツを押し上げている立派な男性器があった。

うえ? 男性器? ポートルランド.....え? だつて? あれ?

「指揮官! これで信じてくれましたか? 私の純粋な愛が神様に届いて私にこんな立派なものが生えてきたんです!」

頬をつねる.....痛い.....夢ではない

「あれ? 指揮官聞いてますか? しきかくん?」

「ひっ! ポートルランド聞いている聞いている! だから一旦止まってくれ!」

「まずはショートパンツを履け。そしてどのような経緯でそれが生えてきたのか教えてくれ」

「おちんちんが生えたのに気づいたのは今朝なんですよ。昨日の夜もいつも通り美味しいご飯をインディちゃんと食べて、インディちゃんとお風呂で洗いつこして、インディちゃんとお揃いの服を着て、インディちゃんと同じベッドで寝ようとしたら拒否されたので仕方なく本当に仕方なく一人でインディちゃんの抱き枕NO. 21を抱きながら寝るいつも通りの夜でしたよ！」

「本当にそれだけ？ 明石か夕張に弄られたりしてない？」

「私の身体を弄っていいのはインディちゃんだけです！ まあ指揮官が触りたいならインディちゃんの魅力を超えてからにしてくださいね！」

それだと本当に原因不明である。こんな面倒を引き起こすのは明石又は夕張である。その二人では無いとすれば……まさかとは思うが本当にポートランドの溢れる愛が男性器を生やした？ いやそんな訳は……

「これでやつとインディちゃんとの愛の結晶が……うへへへへへへ♡」

「ちよつ！ ポートランド！ それは流石にまずいつて！」

「何がですか？」

「こんな前線基地で子供を作られちゃ困る！ それにインディだって困るだろう！ お前にとつてもそれは不本意なはずだ」

「でも指揮官私……今……すぐくムラムラしてるんです！ 今すぐ発散したいんです！ インディちゃんとハメたいんです！」

「一人でどうにかしてくれよ……」

「男性の性処理の仕方なんて知りませんよ！」

「とにかく！ 他の艦KANISSEN船には迷惑を掛けないでくれ！ 俺も協力してやるから！」

とにかく明石に聞いてみよう。こんなこと今までになかったのに……仕事がまた増える……

「指揮官……今協力してくれるって言いましたよね……」

「うん？ まあ俺にできることならな」

「じゃあ……これを静めるの手伝ってください♡」

「ふえっ？」

気付いたら押し倒されていた。

「だってほかの艦KANISEN船に迷惑を掛けなければいいんでしょう？♡」

ポートランドの目が怖い。ちよつとちびりそう。抵抗しようとしても艦KANISEN船の力に敵うはずがなかった。

「はあっ♡はあっ♡指揮官……インディちゃんの次に良い体してますね♡」

服を剥がれ全裸になる。ほっそりとした指が身体を撫でる。

「ポートランド！ 一旦落ち着け！」

「うるさいです！ 指揮官は黙って私のおもちやになっればいいんです……よつと♡」

ポートランドが何処から取り出したローションを指につけてアナルに突っ込んできた。

「……っ！」

音を立てながらこちらを責めてくるポートランド。

「指揮官♡お尻♡グチョグチョいってますよ♡えっちですね……♡」  
「うあ……くあっ……いやだ……やめて……」

「嫌ですよ♡私はムラムラしてるんです……でも指揮官はインディちゃんとハメさせてくれないんでしょう？ ……じゃあ指揮官をパコパコするしかないですよね♡」

菊門に彼女の亀頭が押し当てられる

「じゃあ指揮官♡いただきます♡♡」

「まっつ

「っ……♡はあ♡入っちゃいましたね♡気持ちいいですよ♡し・き・か・ん♡」

入った、入ってしまった。尋常ではない異物感と痛みに襲われる。パンツ、パンツ

「……っポートランドもうやめて……っ」

「んっ？ 聞こえませんかよっ♡」

腰を乱暴に振る、ただ快樂を得るために、逃げられない絶望感、ぬぐいきれない恐怖、今私は彼女に完全に支配されていた

「はあっ♡はあっ♡指揮官♡……出しますね……♡」

嫌だ、辞めてくれ、それだけは、本当にそれだけは、

ドピユツ♡ビュルル♡

「中っ……出し♡気持ちいい♡♡」

「あ……うあ……」

これで終わった……くそっ……なんでこんな目に……

「指揮官♡気持ちよかったですよね？♡」

「っ……そんなわけないだろっ……」

「じゃあ指揮官にも気持ちよくなって貰えるまでハメちやいますか♡

頑張っちやいますよ♡♡」

「……え？」

それから詳しくはわからないが大体4時間くらいポートランドに抱かれていた……何度も中に出され、身体にもかけられた、痛みは少しずつ引いていって快樂が脳を支配していった

「っ♡ぽーとらんど♡もっ♡もっ♡」

「指揮官も欲しがりですね♡はいっ♡お望みの精液ですよっ♡」

彼女の肉棒から精が吐き出される。彼女が雄で俺……いや私が雌、それはもう覆すことができない事実であった

「……ふう私も疲れてきましたしそろそろおしまいにしますよっ♡」

長時間繋がっていたせいでもう私の弱点は把握されてしまっている。前立腺を何度も突かれいくのが止まらない

「……っ♡♡♡」

「受け止めて下さいっ♡指揮官♡」

私のもうもどれない

「インディちゃんの次に愛しています♡指揮官♡」

「原因はわからないにゃ」

明石から衝撃的な言葉が放たれる

「じゃあなんでこんな事に……」

「やっぱり愛ですよ！ 愛！」

「だまらっしゃい」

「いでっ、指揮官チョップしないでください！」

「真面目な話をしてるんだよ！ 脳みそ真っピンクのシスコンは黙つとけー！」

「そんなに褒められると困っちゃいます」

ムカつく、可愛いけどムカつく

「まあ出撃にも影響ないみたいだししばらくしたら戻るかもしれないにや」

出来るだけ早く戻ってくれ……そう切に願うのであった。

「指揮官♡今夜も付き合ってください♡」

本当に……



不知火にも生えてきた！

ポートランドの一件から数日後

私は夜にポートランドから求められることが多くなった。まあ拒否権なんて無いに等しいのだが。

私も個人的にポートランドに生えた男性器について調べているが特に有用な情報は得られていない。

「指揮官、デイリー任務があと一つ残っているぞ！ あと少しだしちやちやつと片付けよう！」

秘書艦のクリーブランドに声をかけられる、少しボーとしてしまっていたようだ。

「ありがとう兄貴！ ちやちやつと済ませてくるから先に休んでいいよ！」

「兄貴って言うなく！ 女の子なんだぞ……」

兄貴の叫びを無視して任務を確認する。戦術教室関連の任務らしい。そういえば教科書がなかった気がする、在庫を確認するとやはり攻撃教科書T3がない。デイリーの海域掃討もやってしまったし、久し振りに不知火の購買部でも覗いてみるか。

「不知火〜いる〜?」

返事がない？ いつ覗いても居たはずの不知火が居ない。購買部の気温もいつもより高い、不知火が居る時はもっと寒かった気がする。

購買部の奥をのぞくと継ぎ接ぎのあるうさ耳をつけた少女がいた。不知火だ。

「はあっ♡はあっ♡んっ♡」

荒い息が聞こえる、もしや体調でも悪いのだろうか？ そうであれば一大事である。

「しらぬ〜い大丈夫か〜?」

ビクッ！

改めて声をかけてみる、反応があつたので意識はあるようだ。

不知火がギギギと音がしそうなくらいぎこちなくこちらを向いた。

顔が真っ青だ、やはり体調が悪いのだろうか？ そうならば早く対応しなければ。

「どうかしたのk

言葉を失った…振り向いた不知火の下半身に釘付けになる、そう、彼女にも生えていた

今まで海域でも見たことがないほどの速さで不知火に店の奥に引っ張られる。

「見ましたね、妾の部屋を覗くとは、やはり大うつけですね。そんなだからいつまでも大うつけなのです。そもそもなぜこんなに妾を放置していたのですか！ 「おぼけ」だって寂しくなるのです！ もう……本当に……」

すごい速さでまくし立てる不知火。そんなに早く喋れたのか。それはそうと、不知火さん丸出しである、なんなら擦り付けられております。

「ふーっ♡ふーっ♡指揮官様、妾の自慰を覗いた対価、払って頂きます♡」

「ん…ちゅっ…れる…ふはあっ…♡れる…ふう…しゅき…です…♡」

唇を奪われ、告白された、顔が熱くなる。

「ふぁーすとぎす」でございます♡」

嬉しそうに微笑む不知火。その顔はまさに恋する乙女そのもので普段の不知火からは想像できないものだった。

「服…脱がせますよ…」

テキパキと服を脱がせていく不知火、まだ頭の整理が出来ていない。不知火が私のことを…好き？

「接吻しただけでもうこんなに♡この大うつけめ♡」

不知火が嬉しそうに言う。私の肉棒を不知火がしごき始める。

「ふっ♡くうっ♡…あっ♡」

「気持ち良さそうなお顔♡妾も滾ってしまいます♡」

不知火がペースを上げ、激しくしごき始める。

「不知火っ♡射精るっ♡」

私の白濁が不知火の綺麗な黒髪を汚す。美しい彼女を私が汚して

いることに興奮してしまった。

「次は妾を気持ちよくしてください♡」

不知火の肉棒が私の口に突っ込まれる。初めての味。少ししょっぱい。決して美味しくはないが彼女のものだと思おうとたまらなく愛おしかった。

「れろ…ぴちや…ふあむ…♡」

彼女の肉棒を精一杯気持ち良くしようとして舐めたりしてみる。

「ふふふ♡お上手です♡ペース…上げますね♡」

不知火がペースを上げる。肉棒を激しく出しては入れ、入れては出し、を繰り返す。

「そろそろ♡…射精ますっ♡こぼさないでっ♡」

膨らみ硬さを増していた彼女の肉棒から白濁が放たれる。白濁液は粘性が高く、量も多かったので口から少し溢れてしまった。

「こぼしてしまいましたね♡これは…お置ききです♡」

不知火が勢いよくアナルに指を突っ込んでくる

「もうトトロトロじゃないですか♡一人で弄ってたんですか♡この変態♡」

ポータランドとの行為の所為でもうこなれてしまっているアナルをいじられる

「もう十分ほぐれましたかね♡では♡「おばけ」ちんぽ入れますね♡」

不知火の肉棒が私の菊門に侵入してくる

「ひぎっ♡しら…ぬい♡」

「可愛いですよ♡指揮官様♡とつても…あつたかい♡」

彼女の熱が、想いが直に伝わってくる、彼女の雄が私を犯してくる

「ふっ♡…くうう♡…ひいつ♡」

「この日をつ♡待ち望んでおりましたっ♡貴方と繋がれるっ♡この日をつ♡」

快楽を得るためだけに乱暴に腰を打ち付けられる。

「ここがいいのですか♡では…もつと突いて差し上げます♡」

前立腺を激しく突かれる。頭が真っ白になって何も考えられなくなる

「そろそろ射精しますよ♡♡全て受け止めてください♡」  
彼女の子種が入ってくる。だが彼女の腰は止まらない。

「このままずっとあなたと繋がっていたいです♡さあ次♡イきますよ♡」

このまま朝日が昇るまでまぐわい続けた。

「愛していますよ♡世界で一番貴方のことを♡」

「私も…だよ♡」

「不知火はいつからそれが生えてきたの？」

不知火がいつもの顔を崩さず答える。

「確か…数日前の朝に起きたら突然…といった感じです。」

「何か心当たりはあるか？」

「いえ…特には何も…お役に立てず申し訳ありません。」

不知火がシユンとなる。可愛い

頭を撫でながら彼女に微笑みかける。

「いや、いいさ。とにかく明石に相談してみてください。あと不知火以外にも生えてきた艦KANISEN船がいたら伝えてくれ。」

「その娘にも手を出す気ですか？この大うつけが…」

口ではそう言ってくるが目には不安の色が見える。先程あれほど愛をぶつけられたのだ、当然不知火以外は見えまい（フラグ）

「そんなわけないだろ。お前が一番だよ。」

「ありがとうございます／＼」

頬を染める不知火、可愛い

（彼は私だけの物♡誰にも渡さない♡）

これ以上仕事が増えませんかように。願いよ届け！

アドミラル・ヒツパーにも生えてきたぞよ

新しい朝が来た希望の朝だ。つい最近はずっとポートランドと不知火に毎晩代わる代わる犯されていた。

2人、特に不知火がこのことについて不満そうにしていたがポートランドに耳打ちされた後はむすつとしていたが特に文句を言うてくることが無かった。

さて、私は今鉄血寮にいる、理由はただ一つ…お酒が飲みたい。すぐく飲みたい、溺れたい。執務室だと飲む気にならないし、重桜寮では伊勢や日向に絡まれる。消去法で鉄血寮しかないわけだ。

鉄血寮の廊下を歩いていると目の前に弄りがいのありそうな金髪が呑気に歩いている。そう、愛すべき我がツンデレまな板、アドミラル・ヒツパーである。

これはやるしかあるまい。スカートめくりを…な説明しようスカートめくりとは、日本古来から伝わる由緒正しき悪戯、男のロマンである。私の望むロマンはそこにある。

ただ悪戯というのは相手を選ばなければいけなくて、相手を間違えると、殺されたり、監禁されたりする。その点ヒツパーは、安全で殺されはしない。最悪でも半殺し程度だろう。

私は彼女に向かって静かに近づき彼女のスカートを思いつきめくった。

彼女は振り返ると顔を真っ赤にしてこちらを睨んだ。

「意外に可愛いのはいてますなあ、ヒツパーちゃん？」

言い終わる前に激しい痛みとともに意識を失った。最後に見た彼女のスカートに張っていたテントを嘘だと私は信じたい。

……………

「何…これ…」

女であるはずの私の股に男性器が生えていた。

朝起きて、なんか股に違和感を感じてパジャマを脱ぐとそこにそれは生えていた。

いや、意味がわからない。心当たりもない、昨日はすぐ寝たし、ちや

んどご飯も食べた。鉄血の技術にもこんなものはないし、なんだこれ。

それにすぐく：ムラムラする。発散したいけれど男性の性処理の方法なんて知らない。どうしよ…

たまたま今日が非番だったからいいがこれからどうしようか。こんなこと誰にも言えるはずがなく、悶々とそしてムラムラしながら歩いていると、バツとスカートがめくられた。

「意外に可愛いのはいてますなあ、ヒツパーちゃん？」

顔がカーツと赤くなるのがわかる。このうざい声は、おちよくるよ。うなこの声は、この母港の指揮官ただ一人。条件反射で彼を蹴り飛ばす。

「このへたくソバカドジアホマヌケ!!死んじやえ!キールの海に沈んじやえ!」

彼が起き上がらない：あれ?ちよつとやばい?息は：してる。気絶してるだけか：よかった。

冷静になると共に自分のうちから湧き上がる燃え滾る欲望を思い出す。

別に彼のことは嫌いではないし、最近では認めてきている。仕事はしつかりしているし、指揮のセンスも悪くない。そんな彼が今、無防備な姿を晒している：もう：我慢の限界だ。

アドミラル・ヒツパーにも掘られます！

部屋に連れ帰ってしまった…彼の顔を見ていると胸の奥からどんどんと熱く煮え滾る情欲が湧き上がってくる。

ぴとりと彼の頬に触れる…わたしと比べて体温が低く、わたしがいかに興奮しているかがわかる。

…キス…したい…少しずつ私の唇を彼の瑞々しいプルンとした魅力的な唇へと近づけていく…

彼の唇と触れた瞬間、心の中で膨らんでいた物が爆発した。

「はぁ♡はぁ♡」

自分でもわかるくらいに心臓が脈動する。

もう一度、もう一度と何度も唇を貪る。最初にしたような初々しい恋人同士のキスのような優しいものではなく、単純に捕食者が獲物を貪るような激しいキス。一回一回、唇を重ねるごとに頭の中が蕩けていく。もう彼のことしか考えられない。好き好き好き好き好き好き。一頻り彼との口づけを堪能したあと、少しずつ、少しずつ彼の肌を露出させていく。彼の呼吸の一つ一つが私を滾らせていく。上半身の服を脱がせ

終わり、胸を触っていく。乳首を優しく擦ると「んっ♡」という色めかしい声と共に身体をよじらせる。この反応からしてきつとここを弄るのは初めてではないのだろう。一人で弄っていたのならば…この変態にお仕置きをしなければならぬ♡

………

胸辺りへの違和感と口元のベタつき、そして何よりもひどい頭痛で目が覚める。

知らない天井…荒い息づかい…きつとヒツパーにセクハラしたわたしをポートランドか不知火が見つけて何処かに運んで行為に勤んでいるのだろう。そんな事を考えながら上半身を起こすと予想をしていない人物がいた。

「ヒツパー!?!お前っ！何をしてる!?!」

ヒツパーがなんで…こんな事を…。

「なんで？…ふふっ♡今まで自分が何してきたか覚えてないの？」  
「いつもいつもセクハラばかりして、いつかやり返されると思ってたの？おめでたい頭してるわね♡」

いやいつも蹴ったりなんやらしてますやん、と言いかけたがやめておく。今刺激するのはきつと良くない。決して怖いわけではない、決して

「まあそういう事だから♡諦めて身を任せなさい♡天井のシミでも数えてたら終わってるから、ね♡」

ぼろん、という効果音がしそうな勢いでヒッパールの股間から肉棒が飛び出す。

「ヒッパーっ…お前それ…どこで…」

ヒッパールの唇がぐにやりと歪む

「そんなのどうでも良いじゃない♡ほら、早く服を脱いで♡」

そう言いながら服を無理やり脱がされる。抵抗しようとしても艦船の圧倒的力には意味を為さない。

「誰が抵抗していいって言ってるの！♡ほら！啜えなさいよ♡」  
そう言っただけでヒッパールの肉棒が頬に押しつけられる。

「何よその目つき、苛つくわね♡オラッ♡しっかり啜えろ♡」

今度は髪の毛を掴まれ、無理矢理口に肉棒を押しつけられる。

「そうそう♡素直にいうことを聞いておけばいいのよ♡あ、もし噛んだりしたらあなたの大切なところ、使えなくしちゃうからね♡」

ヒッパールの放った一言により、心の内の恐怖が増大していく。

「んっ♡なかなか上手いわね♡その調子よ♡」

細心の注意を払いながらヒッパールの肉棒に奉仕していく。

「そろそろ出るわよ♡全部飲みなさいっ♡ねっ♡」

次の瞬間ヒッパールの肉棒から大量の精液が放出される。口の中でドクン、ドクンと波打ち、その苦味がこれが現実であると嫌でも認識させられる。

「ふふっ♡顔、蕩けてるわよ♡ドMなの？♡これだけ上手いなら誰かの啜えた事でもあるんじゃない♡」

ポートランドと不知火との行為が脳裏をよぎり、ヒッパールから目を



逸らす。

「えっ？本当にやってたの？」

コクンと頷くとヒツパーの瞳から光が消える。

「そう…まあ良いわ。足、開きなさい」

さつきまでとは打って変わって声が冷たい。少し驚いて動きを止める。

「早くしなさいよー」

パアン！と頬をぶたれる。身体と首がおさらばしていないところを見ると手加減はしてくれているようだがそれでも痛い。

「ほらっ！早くっ！しなさいよー」

何度も何度もぶたれる。足を開いても止む気配は無い。

……………

「はあ、はあ」

気づくと彼はぐったりして泣いていて、唇から血も出ていた。彼が他の誰かとも関係を持っている、そのことを知って頭に血が上ってしまったようだ。

「…ねえ、それは男？」

彼が首を振る。という事は自分以外にもこれが生えてきた艦船KANISENがいるということである。誰かは分からないが今はいい。散々ぶつて彼も今は抵抗する気が無くなっているはずである。それにこんなに可愛い顔をしているのだ。抱くなら今しか無いだろう。

「ほら♡今から入れるわよ♡しっかり目に焼き付けときなさい♡」

メリメリと音をたてて彼の中に肉棒を押し込んでいく。濡れていない中に入れられ、苦痛に歪む彼の顔が堪らなく愛しい。

「ふふっ♡ねえ、痛い？痛い？」

彼がうなづく。

「そうよね。痛いわよね。でも仕方ないでしょ。アンタがあんなに可愛い顔で私を誘うんだから。恨むなら自分を恨みなさい。」

再び涙を流し怯えた顔をする彼へ腰を打ち付ける。しばらくそれを続ける

「んっ♡あっ♡ふうっ♡」

と彼から甘い声が漏れ出す。

「ほらっ♡感じてるんだろっ♡気持ち良いって言えよ！」

「♡気持ちいいっ♡気持ちいいですっ♡」

「っ♡」

初めて聞く彼の感じている声が堪らなく心を焦がす。今まで経験したことが無いほどに私を昂らせる。

「そろそろ出すから全部受け止めなさいよっ♡」

「あ♡ヒッパーっ♡やめで♡抜いでっ♡出さないで♡」

彼の一番奥に届くように、腰を押し付けるようにして射精した。びゅるびゅると音を立てて彼の中に侵入していく。

「うあ♡出てる♡ヒッパーの出てるっ♡やめてって言ったのに♡言ったのに♡」

甘い声で彼が私を睨みながら言葉をぶつける。…それが私を興奮させるだけだと知らずに♡